

Z111a アマチュア天文学史から見る学問の意義

磯部洋明（京都市立芸術大学）、玉澤春史（東京大学）

戦前からアマチュア天文家の育成に尽力していた京都帝国大学の山本一清は、「学者とアマチュア」と題した文章の中で、「狭い『学術界』のためには、専門家は大切な人であるが、広い『人世』の文化獲展のためにはアマチュアこそ誠に貴重なる存在と言はねばならない」「天文学のためにアタラシ生を棒に振って単なる技術者になるよりは、むしろ天文学的教養を経て、明るく正しき『人間性』に還元せん」と述べ、アマチュアの役割を通して学問の本質的な意義について言及している（山本 1934, 天界）。本発表ではこの山本の理想を体現しているように思われるアマチュアによる天文家たちによる3つの事例を紹介する。1つ目はアジア・太平洋戦争中から終戦の年にかけて山本に黒点観測記録を送り続けた全国のアマチュア観測者たち、2つ目は移民としてわたったブラジルで天文学を含む自然科学の研究に取り組んだ日系人たち、そして3つ目はハンセン病療養所で気象と天文の観測を続けた入所者たちである。これらの事例は、専門的な学術誌に掲載されたり実用的な価値を生み出したりするわけでもなくとも意義のある自然科学的営為があること、それと同時に、（逆説的ではあるが）ただ一人自然を探求するだけでなく、その営為の成果を他者と共有しコミュニティや社会の中で承認されることにも大きな意味があることを教えてくれる。これらのアマチュア天文家たちの歴史と通じて、天文学、ひいては学問の今日的な意義を問い直してみたい。